句兄弟　下

へ利5
2969
3冊

随縁紀行

甲戌仲秋

木母寺にまうで乃舎ありし夜の月　晋子

こよひの秋一夜の月風光をつくると極けるも友なきもうれてもしを石山なく詩て漸みをゑんいや嵯峨乃信輪さとまりて廣沢なれともあらく心定ありて遠きおもひをはせて出る日なかいづれなけるや思乃外の枕

へ　5

雨に旅のおもひをまして今さらに
男もすがらしなくて一夜の逍遥を
すゝみ侍るにも

九月六日にかへして江戸をたち郷をこえ
われ送りけるに緒柳の所より
道途をみる千秋乃秋のうち　岩翁
まつ人乃送りてしのぶ初月家　亀翁
六郷のわたりにて
草まくら稲千縄のしつくや　擴几

箱根路にて
杉の上にしるてみえける村抱　晋子
秋の宮尾上の杉をおさへけると
いはゞこゝろもなかりけり
三嶋にて旅ゆの重陽哉
門酒やなる金のゆふの菊をおり　嵐子
銀銀や加賀の新て礼するきくの酒　岩翁
きく酒や畠の中乃小家まて　尺草
ある鴨にし所のきくや旅の形　亀翁

原回頭

銀雪やしら毛を富士の風　晋子

富士と常雪の面やし秋乃色　千翁

富士川渡航

不香や笠赤蜻蛉のかゝり足　撲几

清見

ありつまの塩やきさし萩の色　岩翁

ほのゝ鴫の落るも惜しさよみかと　尺草

志つゑかい

欲子屋子名をとゝ問し山縣　尺中

うつの山

神なくゑ狩や消ん荒れ尾　千翁

小夜社の襦袢うつして了の宿　撲几

御所柿をまつして色ゝうつの山　尺中

うつの橋にゐるも餅をそはの花　露子

佐夜中山

草鞋ぞし推ちゞもてゝ緑越　尺中

赤松をまじにつさ寺し山の色　千翁

乃役ハ玉祭くさの小松の山　晋子
十二日ハけふより秋色くにて入
森ヨリ　ミくり　大居　秋色
袖すりや息杖つきる松の蔦　松翁
むさゝしも康追ふ小舎子蜂に　才麿
妹の巣て呉持ちる山路のふ　尺艸
合羽着て康を渋りるや秋色尼　晋子
四十八瀬とよみける名のことくのは
かくてといふなる八十余瀬と

瀬乃数やあの名以谷の岸鳴る　尺艸
せきとめし垢離場へ下る岩伝　接九
秋色禅定下山の時
雨は晴ていくへ御紀の上包ミ　才麿
引しまて杖を投けるふりもかな　晋子
宮谷川より既に下るとて
山風や雨打はらふみなみ川　岩翁
今の境渦巻つゝやらゝ玉祭　接九
大いに切所といふなるも　山高ク

鳥不ㇾ巣（クハ）水清魚不ㇾ住

志のゝ色や耳もいろく七ッ釜　松翁

二俣川　推河脇の所社ハ九切所也

打擢ふし飽は色より淵の色　晋子

岡や瀬や浪う手渡さ湊立　中翁

かじま舟そしつくすりく

我笠や膝さきせまる家の雨　尺草

十三夜　濱松にて

内玄関京をむのおそやの三夜　十丈翁

のちの月兎見すへん宿をつき　松翁

十三夜出る乃給やたのみの声　岩翁

居乃ゝく味方の原を一月ゟ季　尺中

いつまでも京をながむるかれ

後の月わかされし江戸の庵　晋子

熱田奉幣

芭蕉翁甲子の紀行にハ社大イニ破れ築地ハたふれて草むらにかくるかしこに縄をはりて小社の跡を

しるし有て石をすへて其跡と
なしぬよゝ其人の心のほとし生
きるまて目もくれぬなからも心やすらて
とゝろきより興廢時あり甲戌乃
今は造葉ありしたに見えけらし

文つきと稀の軒や杉の月　音子

名月の宮やあつまりし露の月　末為

高きこのお帯おろし桜夜比月　岩翁

津島西生佐天王

縁乃稲孫五郎との色守とろ手　末為

十六日　くハなみまく

浜魚もそよの浮斎（サイ）りいせ乃うゑ　揖几

大道乃こゝして流るゝ種芦哉　尺巾

男子しもや蛤もと乃朝の酒　末為

津の泊まて出

伊勢路乃や往来の恩路よの秋　松翁

世の秋や女の旅も伊せこゝろ　末為

いせ旅や秋の日さしぬ氣鼓童　尺巾

宮川にて
むかしより祭主の輿を送りけり　音子
外宮　近くおかみなれて
日にそはて古殿に雲の境外　同
新藻の春清らかなり白石　岩翁
まつる色の秋や種をつむ子等館　尺中
唇の色して寒し宮このうち　亀翁
能キゆや御供いくつとりし来　松翁
内宮　清浄の屋こもらくへて心つくる

さる五十鈴川より遙かに拝ス
男の秋や赤子あまたゐる神路山　音子
まつり集る春の杉かや杉乃札　撰凡
廿日、於福井務兵衛大夫御師家
御神楽　謹上再拝
神の秋七十あまりしいまも神子　岩翁
四ツ竹の紐気はなし　みこの髪　亀翁
秋ふかしみこの足より露の色　尺中
拝し染の雲にかゝるや山色り　撰丸

烏帽子かる秋の調や少まつゝ　松雨
たゝや小刹なくして菊の花　音子
廿一日　二見　舟遊
東秋きらん汐垢離前の菜　岩雨
ひやゝりに汐て洗るや石と岩　千雨
岩のよさく鮭ゆる寒し花　為　音子
汐こりや堤の高さ千人半畠　捻几
秋の水時に浴(アビ)たる一夜こ　松雨
堤の子かし游(ヲヨキ)おけより高の海　尺中

御師の家にあそいりしつく
濱荻にしはし見えこかん醉心　岩雨
秋まとし舟遊の枕と云れけり　音子
奥もまよふ坂の夜や旅宿の道　千雨
御切(ミサ)けり秋つもしあさみの山　捻几
宮河の上に酒送りせる
さらん坂雲く柳のもとしけれ　岩翁
此花を庵にさかせてと云まして
根なき石けに是を河原の社宿人　亀為

主なし花ある時の雛菊ん　晋子

角ト石を拾ひのこせし野菊かな　尺艸

廿三日伊勢ヨリ毛谷孫く出ル田丸ヨリ
検杉より宮川山嶮岨ヲ越ス此京時
としてたゞ一りかけるも奇絶の地し

山畑の芋ほるあとに伏猪かな　晋子

渋柿のいつまで枝の残るらん　牛角

焼栗や脹吹よする山下風　尺艸

こぼし至くる先金寄し揺遊　揺九

みかんに金おとし新たきこ　牛角

裏ちれて糠やく畑のくねりかな　岩翁

川芎の香に流るゝや谷の水　晋子

一ツ家もありくしるかしたき　牛角

奠レ嗔（イカルヿ）野店無ニ肴（コツ）核一薄酒堤レ詰（ナジルニ）
豆莢肥（タリ）と周南が句ヲ感ル

足あゆめる音にあさけも新酒かな　晋子

馬夫の留守火を振こぼす秋の暮　尺艸

山つたふ日の出の虹や川板の経　亀翁

初影之輪　在原寺

梅みる衣の手迄そゝつせ山　晉子
二月の杉や根まわり葛乃色　手爾
たち籠り残の絲やこほし酒　攅几
此ある梁井越かり長谷の絵馬　尺巾
大和柿とて立よりてまれ
泊影めく柿のちかさを悪かり　晉子
孤ふかり初影の下（たた）やまはのも　松翁
時うつりきて真後し

日の目み色あ峠もてるく梅かな　晉子
光明皇后の大仏や釜　手爾
蟲乃声蕣なかくれ涼風の谷　手爾
大佛乃御肌の末期や日のめくり　尺草
廿八日曲都を出るとし
いく秋もしと詩かしかとまかり　岩翁
光の高奥院に音乃て
小野つたし人をみる読む山居かな　晉子
貴の縁の実宝什物ありしくみゆかな

小松教法院上人へまいらせられし

松洛の硯有り翁のもてはやしける歸と

命せられて畫なる硯の形う

ひつかけ似よりけん地色し

松洛乃硯ハ千息をしく手ふ所　晋子

二とせや志るきみりしけ鷹の声　半雨

多武峯

下り坂も秋を峠の出はなれ　同

去月や四ゝ欅とかゝる水車　尺艸

案内さく女なまめく三輪乃月　岩翁

むしくれ三輪の近所なりけり　晋子

下る札をみとれや杉の月　松翁

秋の日のおそるも除し豆乃葉　尺草

詣添ふ香花の紐や苔の道　半雨

みつはつりもや井筒の松丸き　擶几

僧ワキ乃志つゝなる向ふ聲か　晋子

春日　四郎の家人へ遣扇をさとゐめ

志てく城乃剃を頼りよし修る之

今歳目秋の良話をきく里山　音子

日ゝく山く媛子の灯篭秋のこゝ　岩翁

御供部子猿も菓を運ひけり　手爾

心して陰ゆむ乃や縄棟　擯几

淀野秋ぞ向ふ不知とよんを

稲み石乃やをのまきての寄　半雨

木の根遊びゆや小康の角の除（ヨケ）　松翁

二月堂に七日断食りゆ者ありて

桑はり思ひて世ゝ人声

増秋く聖乃古流まて

づぶ粢ほ擦色男を流しんくれり　擯几

廿九日のしの山にこえ白雲堂に

重り蝶面谷をもりつんて山路の家

流ちんさく西に木を伐ル

青木にひま陰ゝのきの色　心

の尽けことこゝ寒き繍般若と

ひかけかもひらせて

青丸の城乃寒さもよしの山　音子

日はうつりやせまきもみねのよし山　まゐ

みそれ拾くも日くもせまくて　擶几

ちる山茶花や苔にちえ白よそ蘂　岩翁

竹のちよりし雅乃奥にゆるまて　尺中

世をゝ　こよひはきすゝかまると
よみ拾ふ所とりかけ
身ならもしむともかしやもとも

抄路乃月見所や九月尽　喜子

雨はのさむことすて

三尺の男をすゞ吟のしくれ哉　同

冬の旅や旅をき月出見侍り　まゐ

十月二日高野山上世を志る深し

小六月高野の池やうしすゞ　岩翁

あきんとの摘ぞ寒し高野山　尺艸

院をを見ありおいて旅ほ巾　亀翁

つらみもよくろとよほし

冬く極楽坊ら波を女人堂　同

卅年比山のみや家子を　擶几

卯塔のうみやけもかさ月　音子

些す又夜の宿すてく
戸をさゝて楷うつ声も夜あらし　丈艸
紀の川いく瀬も有り　こゝ月のそりくゝを
あつさ弓矢をつくみやみをの月　晋子
和哥の都にうつしゝ也湖南に　斗翁
和哥のうら　吹上
夜寒さに手向の京　玉津島あ　岩翁
伽羅岩に千しおりな旅の衣哉　擣几
浦の波　紀三井寺より湖南より　丈艸

わいつみ浜をとけ也片男波　斗翁
玉津島みよりて
浮寝する旅さや玉つゝわかのうら　晋子
帰る鳥
和哥のうらつかけの月を夜見れ　同
粟島にて
舟の雛をかくされたる湾　斗翁
一家の祭てよりまる浦の波　擣几
かけの乃うちけ出る大綱引

高文が家の従者すゝしへて走り
つれて力を添てとゝのへけるとて
鯱ひくつゝし色を染る鯛ハ紅葉　晋子
あまの子たち魚色すむ色
おそろしき小鯛ひとし鯛子の影　亀翁
鯛らせて鯱を蔭ちらそ手をそり　松翁
鯛形をかみの浦や塩ぬる色　揖几
くれの旅も寒しおそ升の縁ぞ色　岩翁
鯛なれて僧何とよむ縁擲　尺艸

住吉奉納

昆布こその手を拭ふ苔の落葉　岩翁
乙女子の火鉢を廻る神楽所　亀翁
木からしや絵馬子みゆる帆かけ舟　揖几
お解や在ほむ新を冬来形（なり）　尺艸
芦の花をあらく流るゝ冬の海　晋子

十月十一日芭蕉翁難波にて逗留
のりし時にまをく人々さはきて彼
旅も子ある者にゆく時もまふて止む

此一帖者亀翁旅泊之日記也
初而有遠遊之志故重父子之
信合朋友之義且祝於神社
崇敬孔佛閣而名境勝槩所
隨所至之幽懐鄙不巧文章流
歡遊之間多有茶酌之暇令
校合哈了則号隨縁紀行而
以負句兄弟集後　晋子

句兄弟追加六格

○鏈句

誰肩に牡丹の旅や初しくれ　曲翠
歎きくて狩ありとさし旅さしよ　杉風
冬月ゐ石部の山を几帳色　杉風
下くのみるひつれをりもの雨　薯子
此ころや沢漬なる籠　桟一
鱗剥ハさ心ちよくもとまひえ　山蜂
一ッ町栄むかしのはるまつ鄭　黄山

ぬのきての尻にもげたる茄子かな　さか農夫　為有
簾て涼みはる家川邊の人通り　思濱
傘りして結ふすゞ雪礫　孫子
精く色を乃れひやうし山さくら　巴水
西ひらのし糸とみ漆杜母ふ　許六
神鶴や沖の釣場も二百尋　閻指
此日あつし鉢の底より動きけし
淋しさのぬるゝは花の咲てなん　山蜂
名月やさまよひかけしくもの糸　杜若

晝涼のみちてけぶり五月雨　野梅
おくとれは大仏の車圍みさん　介我
涼ふり日陰にしみ渡しな火瓶ゑ　岸口
雨雲ふ山よりおれて逃散乃る　揺山
うらなし寸や残もうこしぬ　檜垣　釈青吟
ありくて琵琶の来る日も初雪も　山子
鷺の巣とひろふまゝ蔵下木のあるより　桃鄰
乳もぬしの飛みもをやせみの声　嵐水
落るそふし若芽を出づる若葉かな　素牙

除（ノケ）ものゝかくも嬉し盆志ん　朝三

あきんとの宿り侍り二番凧　湖月

閏月を

はなれけり二（フタ）月かくも田畑　芳山

菜の花の匂ひ色すくなさ哉　令我

夕立やはなしに来し人の肱まくり　青吟

はなれて蝶も食事下戸なりけり　芝莚

寒菊の内をうかゝふ雉子かな　湖風

無門や猶ふりかけし山さくら　琴風

○新句

なまなかの恐ひれても光りかな　老尼 松吟

あかつきや良もみえすに中より出　雲細

おもひわけし袖もはなれの白かな　秋色

鍛冶もまて紙つ色合のさそひかな　思濱

木をさ立て木さうつるをと郭公　安之

垣ひとへあなたしも紅葉の色ならん　鱗羅

七夕の花のさしみや早稲乃花　尼 智月

たはれし蚕（ニユ）わすれ笠（カサ）のあつさかな　許六

みのむしの鳴てもゆかし萩の色　紫乙

衣色のまゝ涼し人こゝろ　緑草

暮のかれ来てなすみ小性の宿　澈士

うね移りやひとり何をてりますて　彫棠

掛物や出縮とほして夜の蠅　梅葉

ふはなる目

言継ともちらかへいさや衣単（ヒトヱモノ）　拙山

浴して

御所と成ルけちゝゝこの移ろ　野梅

時雨ときゝて玉の床かな　神叔

母萬に小柄ゆかりさす移ちかた　一雀

帯ほどに川の流るゝ汐干かな　沾徳

寒暑やあふ色と色と隣より　葛子

冬の部も氣は限りなしみのゝく　桂花

竹のしなへし色なや窓の雪　氷花

くさくさの橋も滅の將縄舟　百里

鳥尾毛をむるもなかもしる寒さかな。　柳玉

ちるもの当く梅も明白とと　東水

蓮の葉や田にも仕付るあの邊　沾德

うるひ女のやさしさ入る楚哉　神叔

晋子もち月のおかうりし　猿の
さうしも竹のうらら作たり送りし女

名月や柰良も二里も遠ぬ也　闇指

幻住庵のめくりやし

石山も積の仕廻や見こり酒　曲翠

あけ人の押やとれなり垂生縫　百里

わらしおかん鮎を鮒の和加織　粛山

よし原や一夜も安房の舟便　芳尾

○清句

雨晴芭蕉子のりてとりさゝへ　晋子

やよひ人の名やものゝこゝろくるし　鱗羅

まどろみけるを紅粉の香物　此君

文をたゝ紫蘇のそめたる小梅哉　秋色

去ぬ膳忌ことしをすく菊の翁哉　梅薬

灌佛やすゞしく並る井戸の垣根　曲翠

妻も女や子のなくして捨ておく　棄捨

おりかゝり雑まきする躑躅の花　尚白

肩衣はゆへのなるも寒き哉　山川

いそぐくや書相乃浪はれ行　冰月

拾ふや木鳥の塀乃外くてもぢ　許六

縮のうち何さうつらん寒さも　含棘

冬の山や鍋り湯とのちも　石尾　角上

飛石乃あるや加うんの主も乾　介我

泥つきの蕗舟まりかへ継めかへ　沾徳

京とや行しるらてらゑん星祀り　酉花

筆やかゝるの行の跡もなし　氷花

○傳句

職人てしるや醫師の紋所　行森

寺塚を尋ねてとふ寺住ゐかな　銀杏

あら女のはしせしものも川の文　彫崇

詠集以

肩継くさき岩の機や山桜　宮嵐

せいるまも親の新さむくまる昏　思演

別まかるや福のつかしし夜乃酒　木奴

新得の志るしも青き〜ん作　酉花

人心ゆるりとけしあり風畑　闇指

星あらしや離家の中を焼てこん　山蜂

以竹く炬燵をともすけふかな　暮子

男女舩にて月とあれ女ありき　秋邑

いつとなく夜の気色なすなき衣　思演

了それとる　蛭の血ぬぐふ田苗かな　孫子

寒さ也もみぢもなし乎　雛の髪　松吟

鮓切しや世俗に羅以夕人　蔦宰

なかの大田もあらん麦秋風　夕牧

山寺の山椒くさしよ火燵哉　角上

人通ふ樗の花や村の奥　介我

きつ音や隣て伊吹の風祓（ハツ）　千那

追ふて瀬をわたり多ひかを　翠袖

けふをかのさゝ所をこすなり　堤亭

駒牽の木曽や出らんみかの月　去来

膳所　亭

鷄雛もあまゑてつくる楝の陰　正秀

○麗句

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

我宿乃婉の顔見るつゐでかな　孫子

鐘君もてひらん桜のちりけり　彫棠

里をもり火打袋をかざりけり　安之

散花や根へかへてくれけるかな　晨鐘

咲花や月梅金にかゝる寿もなし　秋色

蓼貫ふ使ひやりてつまゝせけり　黄山

川わたりけるきはまる舟のあと　膰羅

山吹の小袖くゆるもの花の摸様　野風

なてしこや櫂の雫や笠の内　挖山

植物にて早苗の蘭田のゆふさかり　一雀

春の舞や木仏を莚の数合せ　沾徳

暮のもち老も二ふたき立隠し　彫棠

石川や簗うつ瀬の音通り　桃鄰

涼み舟嶋の木を越す月ゐかな　紫紅

白魚や身をもれぬる　佃島　挖山

寝水や星のこほりてありけり　素竹

石竹の種ゆかしき床の山の月　卅風
葬に人まゐりする墓くさり　山川
絹川の渡しを鷺かすむ秋の雨　一雀
少するものを鶏や猿の蔦かづら　彫棠
雑まる米へ男すかされ入ぬも踊　思濵
名月に揺りりや柿の刻たちと　角上
淋人気の曲し白牡丹　柳玉
蓮の毛や衣裳にみるるかな　虎答
痩し家の村萩長子月夜哉　赤陌

富士の山に鰹あげし者かな　松吟
鰹もおそき迷ひのことといひしけれし
次てゆくるなり
日比まで門をゆく秋の夜念佛　介我
病中吟
長髪やゆるしゆるしき硯箱　山川
吉来て海にうつるや松の森　松以
法蓉房をかりゝる魚打てちる　牝梅
見しや松の都見る雨風り　一江
川越や蚕手わかる横田川　彫棠

涼しさに彼も浮世の子もちかな　野風

角巻て生のしぼりやあさ茶哉　一境

うつく月を襟にかけたる團かな　思演

嫁ぶりや物あらはしく粉ふ新　節水

あちさみの雨に島を過る山つゝじ　野梅

羇中

坂のありと春をもとむる女かな　揺白

舟渡や先小盃つかむ膳の外　廬牧

みなしくも畦庭あさく刈穂かな　杉風

豪句

六月や峯に雲置あらし山　芭蕉

むらしくも千川の鮎乃食かな　湖夕

卯の花に芦毛乃馬の夜明哉　許六

山鳥の尾にくるゝや雨の氣　曲翠

かのみなとつはりくま柳かれ　野梅

すゝしけに筆鄭のすゞしさ　湖風

母の墓にまゐりて

家ありやすゝきを取く荷の方　秋色

粉ぬかの漬つまりけり冬菜　松吟
一節乃乳の毛や命なかみ　湖風
汲かのや井筒の雪に袖のあと　其詞
好色紙子蘭の伽なる白かな　口遊
ひとりねや暑い盛も花乃後　含棘
三十のおのれとや鰹舟　撒士
氣をとるいちひさくし山さくら　寒玉
わたし舟船賃なくて涼みけり　白盃
疫所の水をあびせし旅の暑　彫棠
老人の膝のうへにや猫涼し　神叔
門過て新を追すなる鰹　泥足
やくわうの目やこれてもあまこうの月　青吟
出るをたのしみ入るをなしかな　介我
貝ふき風のまつりん死木立　彫棠
應々といへど敲くや雪の門　去来

人をのく得ざれ不るあるひハ雲を凌ぎ水にのぞミあるひハ眼前に旋ひ幽谷を探る志も只等しく明らさまを向ふにかく是を見ん海にあつめ工となるされハ足下にはしる玉銭拾ひ得しく山を穿ち海に入る又其中にありてろそとなりぬるものハ安く目にみえん流損求めんとみを傷しを拾ひきる人に

行當りたりし是に原詩本歌の要
を見せて肖を詠じていへく彷彿
子美は一度花としいふを彷彿の意に
一葉花とせん見え霊澈が林下何曾見
一人といへるは王太尉が寄遁得たり此
地ヲ誰か一人萬句中の宗匠なるし
満りしとんの変化まゝに色して文さる文
ありて汀やうかりあるをさとりり

志賀の浦みとよめるに志賀乃らしや
遠ざかり行波まより栗氷て出る有明の
月也寒陰ての上ゆんなも皆是合辞詞
代なに求め浜しらく風飛さしいなき紀
朝私人左京大夫ハ日夕まハ立西のこ
意味ありかくして小木の葉にて讀へき
讀置是貌文業乎此等となしす
隠くその曲折しかも境をふへき事

句乃従横顛倒自得のうへすゝくハ
ゆるしき物集へしらすはさ給ハく達
大成ゆきさハ中将乃孫子晋子ハ三十
九人此連枝也兄をとりし次句とむさ
俳ら学乃一理ぬるすをみん事極て六
ほうしせとほゐんく沾徳記

京寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板